

●玉縄の学校長

# 地域との交流の輪を



神奈川県立鎌倉養護学校  
校長 齋木 信也さん

特別支援教育の目標は、ハンデを背負う子どもたちを自立させ、そして卒業後には地域や職場など、広く社会参加させていくところにあるといえます。

同校では教育活動を一層たかめる手立てとして、この夏「鎌養フェス 2016」を開催しました。従前からあったイベントのコンテンツを変更して、より地域とのかかわりを深めた内容にあらためたのです。

地域の民生委員・児童委員の方たちや自治会の役員も参加して、7月27日には肢体不自由教育部門の児童生徒を対象に、広場でシャボン玉を飛ばしたり、かまくら似顔絵倶楽部の協力による似顔絵描きの教室、人形劇の鑑賞会などを開きました。

知的障害教育部門の生徒を対象にした2回目の8月5日も、玉縄地区の社会福祉協議会のメンバーがお手伝い。関谷の畑で収穫したよもぎを加えた団子づくりを楽しみ味わったほか、3mほど先にあるリングに向けて円盤を投げ込む、フライングディスクなどのゲームを地域の人達も加わり興じました。



いずれも校内での議論や、同校の卒業生が就職する企業や地域の代表、教育関係者が加わった評議委員会などと相談を重ねたなかで具体化したもので、フェスの中で児童生

徒たちが見せた真剣な眼差しや取り組み姿勢、手作りのよもぎ団子を美味しそうに頬張る姿、出来上がった似顔絵の前での誇らしげな表情など、交流の中から生まれる頼もしい光景だったといえましょう。

「もっと開かれた養護学校にして行こうということです。地域の福祉協議会の皆さんにもお手伝いして頂き、社会とのふれあいをより深め、鎌倉養護学校の存在をより多くの方に理解して頂くことが大事」(齋木校長)だったからにはほかなりません。

これまで、鎌倉市と同校との間で「災害時における福祉避難所の開設」に関する協定が結ばれ、このための協議会もスタートしています。隣接する関谷小学校が災害時におけるミニ防災拠点になっていますが、車椅子などを使っただけの避難所生活は極めて厳しいのが現実といえます。「災害はいつ発生するかわかりません。夜間の備えなどをはじめとして、災害時における障がい者への対応にはクリアすべき課題がたくさんありますが、ハンデキャップを負う人達への支援は我々の役割のひとつ」。ということで、地域とのかかわりあいは、今後とも、一層深まっていくことになりそう。



(フェスでの挨拶も手話を交えて)

「もともと私は高校の教師がスタート」。高等学校の教員生活が物足りなかったわけではないものの、その後に手話の勉強をしたこともあって特別支援教育に強い関心を持ち始めたそうです。手話ができることで、望んでいたろうあ学校への転校が実現、その後は特別支援教育一筋の教員生活を続けました。

「50歳代の教員は量、質ともにかなり充実しています。私も大量採用時代の一人ですが、問題はそれ以下の世代、40代以下は人員が絞り込まれ極めて少なくなっています。次にバトンタッチするにあたって、自分たちに課せられた課題は少ない教員をどうカバーしていくか」。校長としての大きな役割だそうです。

秦野養護学校から鎌倉養護学校副校長に着任。平成28年4月から現職。昭和33年生まれの57歳。